

2021年3月18日

## 立命館慶祥中学校 第19回卒業証書授与式に係る式辞

立命館慶祥中学校・高等学校

校長 江川 順一

新型コロナウイルスによる感染症予防のため、昨年度の中学卒業式は開催できませんでした。今年度、予断を許さない中ではありますが、卒業生の皆さん全員、そして保護者の皆様のご臨席を得まして、立命館慶祥中学校の卒業証書授与式を挙行できますことは、卒業生や保護者の皆様にとっても、私ども教職員にとっても、大きな喜びとするところです。

ただいま、卒業証書を授与いたしました、第19期、189名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとう。

皆さんが慶祥中に入学した際、山口太一主任が掲げた学年目標は「尽真心」、「真心を尽くす」でした。学年旗の筆字は、私が3年前に揮毫しました。山口主任の風貌そのままに、豪快かつ繊細な筆致になったこと、我ながら満足していました。

皆さんが、学年行事のたびに何度も見詰めていたえんじ色の学年旗。「他者に向ける優しさと、ぬくもりを感じる行動・態度・言葉を持った人間になる」。「尽真心」の学年旗は、3年間、そんなメッセージを、皆さんに向けて静かに、そして確かに語り続けてきたはずです。

思いやりやいたわりのある言動は、凜として清々しく、尊いものです。あなたは、この3年間、「尽真心」の旗のもと、仲間寄り、仲間の心に火をともし温かさを、自身の心の内にしっかりと育むことができましたか？

そして、あなたは、「後輩の憧れとなる」ことを目指し、「伝説の学年となる」、そのことに尽力できましたか？

中1の北海道研修。研修テーマは「尽」。体験すべてに全力を尽くしました。多くの人々と出会い、心に残る話を聴きました。ファームステイ、ラフティング、民泊。あなたは、初めての体験に、仲間とともに一体感を味わいました。

中2の京都研修。研修テーマは、「シン・ベイマックス」。京都で学ぶ感謝の気持ちを大切に、探求心を持って、実り多い旅にする。立命館大学の衣笠キャンパス、BKC、コース別研修、狂言鑑賞。あなたは、幼かった中1からの成長を、仲間とともに実感し、学ぶことに感謝することができました。

立命祭も素晴らしかった。

中1の「モザイクアート」、中2の「南中ソーランの演舞」。あなたは、仲間とともに懸命に活動することで、大きな喜びと飛躍を得ることができました。

しかし、中3の今年度、世界が新型コロナウイルスに翻弄された1年間でした。

本校も、4月の緊急事態宣言の発令による休校、オンライン授業、分散登校を余儀なくされました。学校も、皆さんの命と安全を最優先し、三密を避け、可能な限り感染リスクを低減させるための取組に余念があ

りませんでした。先の見通しが立たないという状況は、それだけで不安をもたらします。不安の渦中で、皆さんは期待に応じて、本当によく頑張り抜きました。

慶祥中の教育の特色の一つは、各界の著名人の講演会です。中3は、コロナウイルスの急速な感染拡大に屈服することなく、これらの講演会を軒並みオンラインで行いました。

- ・隕石研究の第一人者、ボストンの廣井先生と結んだ「秋の講演会」。
- ・海洋プラスチック研究者3名による「プラスチックのごみ問題を考える」講演会。
- ・岡山大学の廣畑教授による「ハンセン病と人権学習」。
- ・APU横山副学長による模擬授業、国際学生と交流した「APUオンラインデー」。
- ・慶祥卒、医科大学病院勤務医の遠藤先生による「ようこそ先輩オンライン講座」など。

これらのオンライン講演会や交流により、過去や歴史と比べる「縦軸思考」、世界と比べる「横軸思考」、これらを合わせた「縦横軸思考」を学びました。

中3は、コロナ禍でも、学びを止めなかったのです。

3月、「19期生祭」がアッセンブリで開催されました。NZ研修が中止となり、さらに代替の国内研修も中止となる中、夏に実施できなかった立命祭を「19期生祭—慶祥中19期生たちの祭典！」として行いました。アッセンブリを会場として、オンラインでも公開したので、ご覧になった方も多いはずですよ。

この祭典は、生徒主導で行われました。常任委員会・立命祭実行委員会・有志、そして、社長も社員も全員慶祥中の生徒である株式会社αフロンティア、これらの皆さんが集まって、企画から運営まで、すべてを取り仕切って開催したのです。

祭典では、ミヒャエル・エンデの名作『モモ』をモチーフとして、各クラス独自の創作で、「時間」というテーマのもと、ストーリーをつないでいくという難易度の高い取組に挑戦しました。そこには、今年度のほとんどの企画が変更を余儀なくされた19期生の、最初で最後の、極めてクリエイティブな取組がありました。私も、開祭式で思わず、「心を一つにして、皆で思う存分楽しもう！」とエールを送っていました。

もちろん脚本も演出も、すべてオリジナル。各クラスが工夫を重ねて演技し、次のクラスへとつなげていく。ここに費やしたエネルギーはいかほどか。皆さんの圧倒的な熱量と瞬発力に感服するばかりでした。

感動の閉祭式で、山口主任の涙声の挨拶のあと、ギターとピアノによるコラボの演奏がありました。そこで、生徒のオリジナルによる、こんな歌詞に出会いました。

どうしようもなくなって すべて投げ出したくなくても  
 僕は知ってるよ 君は何度でも立ち上がった  
 君がこの先 過去に囚われ苦しくなるだろう  
 そんな時には ほら、まわりを見渡してみて

もしも世界が どうしようもなく悲しくなったら  
 立ち止まっていい 振り返ってもいい 傍には君の仲間がいる  
 君が例えば 過去に囚われ苦しくなったら

隣でただ、笑いあって やなこと全部忘れよう  
そんな未来を さあ、今日も歩いてゆこう

私は、歌詞から伝わるメッセージに感嘆しました。ここには、仲間に寄り添い、仲間の心にも火をともしあたかさと愛情に溢れる思いが綴られていたからです。この歌詞には、山口主任と学年団が、皆さんに3年間、ずっと伝え続けてきた「尽真心」が宿っていました。この極めてクリエイティブな取組が、19期生の3年間の集大成であったと、その時、私は確信したのです。

コロナ禍にあって、何もかもが中止、あるいは延期の末の中止。学校行事がほとんどなくなりました。そんな状況で「19期生祭」が開催され、生徒が主導して、すべてを鮮やかにやり遂げたのです。

中学3年生の学年通信「RITA」の副題は、「誰かのために咲く花になれ」でした。この3年間、山口主任と学年団は、「自分を犠牲にしても他の人を助けよう」という「利他の心」の大切さを、82号もの学年通信に乗せて送り続けてきました。

先生方には、もう何度も訊かれたでしょう。でも、もう一度、問います。

「あなたは、誰のために咲く花になりますか？」

そして、最後に、私から改めて、問いたい。

「あなたは誰のために学び、誰のために生きるのですか？」

保護者の皆様、本日はお子様のご卒業、本当におめでとうございませう。本校の教育活動に寄せられました皆様の深いご理解とご支援に対しまして、厚くお礼申し上げます。

皆様は、この15年間、わが子に限りない愛情を注ぎ続けてきました。

何も持たずに産まれてきたのに、溢れんばかりのたくさんの愛情を手にしたわが子。

産まれたばかりの時には、夜泣きに悩まされたり、病気の心配をしたこともあったでしょう。

慶祥中に入学してからの3年間は、悩みも多く、多感な時期で、心配の種は尽きなかったことと思います。

今、皆さんの前に座るわが子は、中学校3年間の学業を終え、両親への深い感謝の思いとともに、晴れの日を誇らしげに迎えています。

今、わが子は、この3年間で、多くの困難を乗り越え、立派に成長されたこと、保護者の皆様にしっかりと報告したいと思います。

それでは、希望に満ちた旅立ちの日に当たり、皆さんの前途に幸多からんことを心から祈念します。

そして、皆さん19期生は、間違いなくこの立命館慶祥中学校の歴史に「伝説を作り、後輩のあこがれとなった」、そのことを宣言して、私の『式辞』といたします。